

## パーリー建築

一軒家に住み毎日パーティー

(四三二字)

空き家に住み、そこでパーティーを開いて地域を巻き込みながら改修を行う集団が「パーリー建築」だ。パーティー(仲間)が集い、パーティーをしながら、という意味で、英語を言いやすく「パーリー建築」と名づけた。代表の宮原翔太郎さんは、大学で文化人類学を、専門学校で建築を学び、卒業後、古民家の改修に従事してこの手法を考えついた。二〇一四年、渋谷の物件の改修を機に「住むこととパーティーができれば、お金はもらわない」と決め、集団を立ち上げた。会員制交流サイト(SNS)などを通じて集まった仲間は三〇人ほど。費用は家主や地元の協力、アルバイトで賄う。これまで新潟県十日町市や東日本大震災の被災地など八件の古民家を、シェアハウスやゲストハウスとしてよみがえらせてきた。浅草に拠点を設け、道具運搬用の車はクラウドファンディングで購入した。工事現場をオープンにして地域の人と楽しみながら人の集う場所へと改修する「パーリー建築」が、地域の活性化や空き家対策の一助になればと考えている。

## パラ駅伝

障がいの垣根を越えて

(四三四字)

さまざまな障がいがあるランナーと健常者のランナーが一つのチームを組み、タスキをつないでゴールを目指すのがパラ駅伝だ。一区間は約二・五キロで、伴走者を含む九人が一チームで計二〇・五〇四キロを走る。日本財団パラリンピックサポートセンターが主催して二〇一五年一月に第一回が開催された。第二回「パラ駅伝 in TOKYO 2017」は、三月に駒沢オリンピック公園で開催され、関東をはじめ全国から一四都県の一七チームが参加した。

一区は視覚障がい者と伴走者、二区は聴覚障がい者、三区は車椅子男子、四区は健全女子、五区知的障がい者、六区肢体不自由者、七区健全男子、八区車椅子女子と決まっている。

第二回大会では、観客一万人以上が声援を送る中、小池百合子都知事がスタートの号砲を鳴らし、応援ゲストとして吉本興業のタレントらも参加した。第一回大会の応援ゲストはSMAP。グループは解散したが、ファンの中にはその姿に触発されて、東京パラリンピックでボランティアをしたいと意志を継ぐ人もいるという。

## オクシブ

個性的なお店が点在

(四三四字)

渋谷のスクランブル交差点から歩くこと五分、文化村通りから東急本店の脇を北上し、代々木公園方面に向かうと、「奥洪」の垂れ幕がある商店街が現れる。

この、神山町、富ヶ谷につながる通りを中心としたエリアは、落ち着いた雰囲気の中で、しゃれたカフェや洗練された雑貨店、ギャラリイなどが点在し、オクシブと呼ばれここ数年人気が高まっている。気鋭のフランス料理店「ビニオン」、映画上映や文化イベントなどが催される「アップリンク」、ノルウェー・オスロに本店があり雰囲気の良い定評のあるカフェ「フグレントウキョウ」、代々木公園の緑が望める開放的なカフェ「ボンダイカフェ代々木ビーチパーク」など、渋谷を使い慣れた人や、NHKに近いため業界人も集まってくるという。

二〇〇八年にオクシブに進出した「シブヤバブリッシングアンドブックセラーズ」は、編集部と売り場が直結している人気店。本のあるライフスタイルを提案する一方で、『休日のための奥渋谷ローカルマップ』を作成し、地域情報を発信している。

## 自炊塾

学生時代から自炊の習慣を

(四三三字)

コンビニや外食に頼らず自分で食事を作る暮らしを目指す、九州大学の少人数セミナーが「自炊塾」だ。勉強や部活には熱心でも、自炊経験が乏しい若者が増えている。これでは良い農作物を買い支える食生活が失われるという問題意識から、九州大学「持続可能な社会のための決断科学センター」の比良松道一准教授(園芸学)が二〇一三年に開講した。全学部一年生が対象。料理研究家をゲストに招き、だし文化や発酵食品の大切さなどを学び調理実習も行う。評価は自炊状況が重視される。

比良松准教授は、料理研究家の土井善晴さんの著書『一汁一菜でよいという提案』からヒントを得て、新入生に「まず小さなトレーを買って」と呼びかける。机の上が散らかっていても、トレーにご飯とみそ汁、漬物をのせれば絵になり、自炊のモチベーションも上がる。やる気を持続させるコツはハードルを上げすぎないことだという。

共働き家庭が増え、家庭料理の崩壊が懸念される時代だからこそ、学生のころから自炊の習慣をぜひ身につけておきたいものだ。